

私の大往生

週刊文春編

8月20日発売 定価（本体820円+税）

いま、医療の発達とともに百歳を超えて生きる人は珍しくなくなり、「人生百年時代」が言われています。寿命が伸びたことと引き換えに、私たちがやがて来る自分の死に向き合う時間もまた長くなっていると言えるでしょう。

自分はどのような死を迎えるのだろうか、どのような死を望んでいるのか——。

「大往生」を広辞苑で引くと、「安らかに死ぬこと。少しの苦しみもない往生」とあります。そんな理想的な死のかたちとは、どういうものか。

週刊文春は、人生を達観した先達たちに「理想の死に方」を尋ねる連続インタビューを掲載してきました。本書はこれをまとめたものです。十四人の多様な死生観に触れることで、読者がそれぞれの「死のかたち」を考える際の一助になれば幸いです。

雑誌掲載後に亡くなられた方につきましては、当時の様子を関係者に取材、「それから」として掲載しています。

1 中村仁一（医師）「理想は『孤独死』と『野垂れ死に』」

2 渡邊恒雄（読売新聞主筆）「三年後、新社屋の主筆室で突然死したい」

3 外山滋比古（英文学者）「寿司をのどに詰まらせて死ぬ、なんていいね」

4 佐藤愛子（作家）「覚悟を決めて七転八倒して死にます」

5 酒井雄哉（天台宗大阿闍梨）「自分のすべてを社会に残して、空っぽで死んでいく」

*それから

6 やなせたかし（漫画家）「みんなを笑わせながら、面白く死にたい」

*それから

7 小野田寛郎（小野田自然塾理事長）「ジャングル生活三十年で、死に対して不干渉になった」

*それから

8 内海桂子（芸人・漫才師）「突然倒れて『あら』っていうのがいいね」

9 金子兜太（俳人）「種田山頭火のように酔って“コロリ”」

*それから

10 橋田寿賀子（脚本家）「理想は安楽死。後のことは全部決めてある」

11 出口治明（大学学長）「55歳で書いた遺書。異国の街角で初恋を思い出しながら死ねたら」

12 高田明（ジャパネットたかた創業者）「75歳までに語学留学。117歳まで生きる」

13 大林宣彦（映画監督）余命半年の宣告を受けて、映画を撮る資格がもらえたと思った

14 柳田邦男（ノンフィクション作家）「人生の最終章を生きるための『十の心得』」